

生きる力を育む体験への関わり
～子どもたちの健やかな成長の
ためにできること～

令和3年3月

柏市社会教育委員会議

提言書

はじめに

私たち社会教育委員会では、これまで2期4年にわたり「子どもたちの体験活動」や「地域と学校の連携」について議論してきました。

前々期「体験のススメ 失敗のススメ」では、子どもたちには成長のきっかけになる様々な体験が必要であるという提言を、前期「地域と学校の連携について」では、地に足のついた活動を伴う、地域と学校の連携への期待について意見を述べました。

これらの流れを受けて、今期はより実践的な活動者の意見を聞くため、新メンバーを迎えスタートしました。

子どもたちの心身の成長には様々な体験の積み重ねが必要です。しかし、地域や多世代でのつながりの希薄化が指摘される現代において、体験とは成長過程で自然に得られるものだけでなく、大人との何らかの関わりを必要とするものであると考えます。

多くの場合、体験とは「活動」そのものを目的とするものではありません。例えば「山登りをすること」が大事な訳ではなく、登る途中で初めて見る景色や植物に感動したり、友達と励まし合って最後まで登れた喜びをかみしめたり、その体験から得た一つ一つのプロセスに価値があると私たちは考えます。

しかし、こうした体験を子どもたちにして欲しいと思った時、関わる大人が保護者、学校、地域団体のいずれかだけでは十分とは言えません。なぜなら、「体験」には、より多くの場面、より多くの人との関わりが重要になってくるからです。

この提言では、子どもたちのより良い体験のために大人個々人ができること、また大人同士が一緒にできることを考え、具体的なヒントになりそうなことをまとめました。

親や先生はもちろん、地域の大人みんなに大事にされて育ったという実感は、子どもたちにとって体験と並ぶ大きな力になりうると、私たちは考えます。

また、社会教育委員会議の場で引き続き子どもと地域に目を向けた議論を深めることにより、柏市において始まったばかりのコミュニティ・スクールの活動や、地域で活躍する青少年育成団体などの活動を後押しし、共に活動するきっかけにできたらと思うものです。

この提言が、保護者、教員を始め子どもたちの様々な体験に関わりうる全ての地域の大人の方にとっての、始めるきっかけになることを切に願います。

目次

1	現状認識	1
	(1) 子どもたちを取り巻く環境	
	(2) 社会教育行政に関する近年の動き	
	(3) 柏市社会教育委員会議における検討	
2	今期のテーマ	4
	(1) 地域と子どもへの私たちの思い	
	(2) 子どもたちの生きる力と体験	
	(3) 柏市におけるコミュニティ・スクールの実施状況	
	(4) 地域の大人には何ができるか	
3	子どもたちの生きる力を育む体験のためにできること（提言）	6
	(1) 提言1 大人自身が楽しもう，大人同士がつながろう	
	(2) 提言2 子どもを主役にする関わり方を工夫しよう	
4	地域での活動事例	10
	(1) 柏市立大津ヶ丘第二小学校	
	(2) 柏市しこだ児童センター	
5	今後の活動の提案	13
6	おわりに	16

参考資料

社会教育委員会議 協議の経過

社会教育委員会議 委員一覧

1 現状認識

(1) 子どもたちを取り巻く環境

昨今、子どもたちを取り巻く環境の変化が大きく取り上げられています。いよいよ人生100年の時代を迎えると同時に、日本は既に人口減少の時代に足を踏み入れました。

また、高度情報化社会における人工知能などの技術革新に伴い、2030年に社会に出る子どもたちが就く職業の65%は、現在存在しない職業であるとの予想もあります。大きな変化の先にある未来を100年生きる子どもたちのために、今大人ができることは何か、このことを考える必要があると私たちは感じています。

(2) 社会教育行政に関する近年の動き（中央教育審議会答申）

子どもたちの体験について考えるために、中央教育審議会答申に沿って社会教育行政の近年の動きを確認します。

ア 平成27年12月「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方針について」



学校に様々な負担が集まっている現状がある中で、学校がより良い教育機関であるために、教員の負担を軽減する必要がある。

2020年から新学習指導要領が始まり、ここで目指している教育の姿は学校の中だけでは終わらないものになっている。そこで、地域と協力して子どもたちに豊かな体験活動を保障することで地域が学校と一緒に子どもを育てていき、同時に豊かな社会体験ができる地域社会にしていくことが必要になってくる。

コミュニティ・スクールは、学校の負担が増えると捉えるよりも、地域が関わることで、地域も責任を持つ仕組みを作ったと考えるべきである。

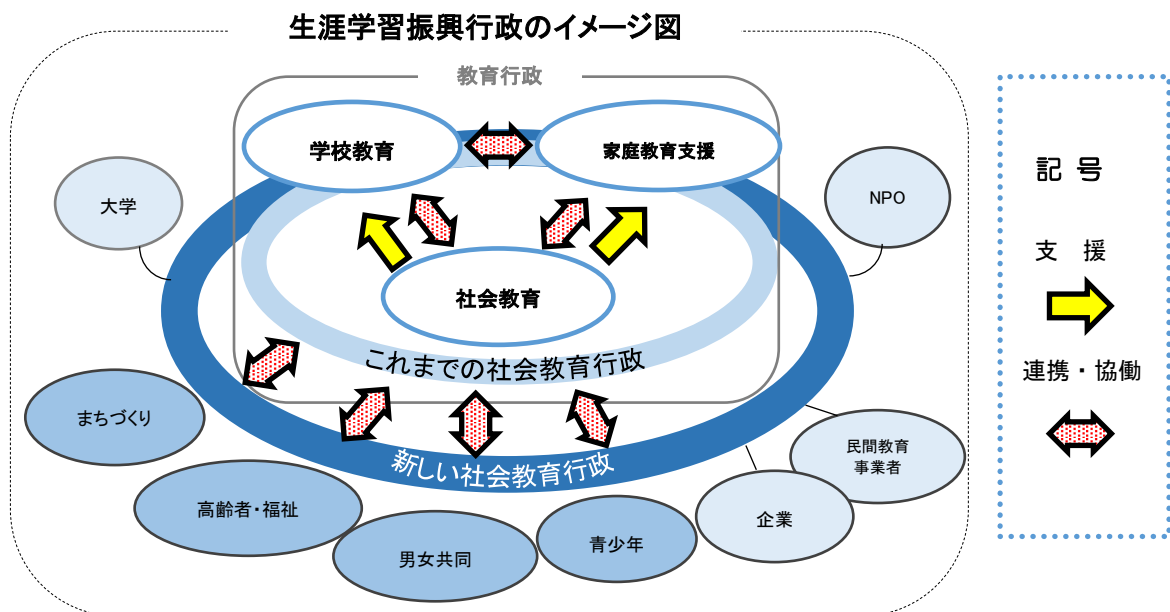
令和2年度第2回柏市生涯学習推進協議会（令和2年11月5日）より

イ 平成 30 年 12 月「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」

- ・ 地域における社会教育の意義と果たすべき役割
～「社会教育」を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくり～
- ・ 新たな社会教育の方向性～開かれ、つながる社会教育の実現～

人づくり：自主的・自発的な学びによる知的欲求の充足，自己実現・成長
 つながりづくり：住民の相互学習を通じ，つながり意識や住民同士の絆の強化
 地域づくり：地域に対する愛着や帰属意識，地域の将来像を考え取り組む意欲の喚起。住民の主体的参画による地域課題解決

社会教育の領域拡大と生涯学習振興行政



社会教育の領域拡大

社会教育領域が周辺を拡大し，教育行政からはみ出して様々な行政領域や団体等と関わるようになる。その上で，学校教育・家庭教育支援とつながって生涯学習行政の中核的役割を果たすもの。

第 4 次 柏市生涯学習推進計画（令和 3 年 3 月）より

ウ 令和2年9月「第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」

ここでは、新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえた生涯学習・社会教育の在り方に触れています。

「明日からの生涯学習・社会教育に向けて」の中では、これまでの対面による「つながり」と、新しい技術を活用したオンラインによる「つながり」を組み合わせることで、更に豊かな学びが実現する可能性を述べています。

また、「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」を踏まえた今後への期待として、新しい時代に求められる社会教育の在り方は必ずしも抜本的な変革によってしか実現されないものではなく、学習者を含めた様々な主体がそれぞれの立場で創意工夫や改善を進めていくことの重要性が指摘されています。

(3) 柏市社会教育委員会議における検討

柏市では、全ての子どもの学ぶ力を育むとともに、地域全体で子どもの育ちや子育てを支える環境づくりを目指して様々な施策を進めています。

また、本会議では近年、以下の提言等をまとめました。

ア 「体験のススメ 失敗のススメ」平成29年2月・提言

子どもたちの近所に気軽に遊べる場所がなく、かつ、遊ぶ時間に余裕のない現状と、子どもたちの自己肯定感の低さとの関係について述べ、自己肯定感を高める体験活動について提言しました。また、「失敗」することから学べるものの多さや、失敗が成長のきっかけになる大切な経験であることを提言しました。

イ 「地域と学校の連携について」平成31年2月・答申

社会の動向と教育を取り巻く状況及びそこから生まれた地域学校協働活動の動きを受けて、柏市の「学校現場」と「学校支援の体制」と連携への課題について述べました。

また、この答申では、柏市らしい「地域と学校の連携・協働活動」の在り方への提言として、子どもを地域の主役に位置付けるという方向性や、地域への愛着と人間関係の強化といった目標を掲げ、「地域連携ルームの設置」、「子どもたちによる地域情報マップの作成と活用」など具体的な取組を提示しました。

これらの社会状況と一連の流れを受けて社会教育活動の在り方を考えた時、子どもと地域に対して私たちにはどんなことができるのか、より実践的な関わり方を検討すべき時であると思います。

2 今期のテーマ

(1) 地域と子どもへの私たちの思い

令和元年7月、今期第1回目の会議において、様々な立場の委員が集い、「地域」と「子ども」についての思いを話し合いました。その結果として出てきたのは、「地域に愛着を持つ子どもの育成」を考えてはどうかというイメージです。

しかし、会議を重ね、それぞれの委員が自身の活動や思いについて話し合う中で、「愛着は大事だが、目的にすべきではないのではないか」との考えに至りました。

なぜなら、私たちの思いは「子どもたちに地域への愛着を持たせたい、あるいはそういう大人に育てたい」というような大人の思いで子どもたちの有り様を決めるものとは異なるからです。

それは1人の委員の言葉に端的に現れています。

曰く「朝の交通指導を長年やっているが、大人になった彼らが、道で会うと“おやっさん”と声を掛けてくれる。これがうれしい。」

子どもたちを地域のみinnで育てたい、地域の大人が子どもたちの「体験」に関わることで、子どもが地域のことに関心を持ってくれたらこんなに嬉しいことはない、カッコイイところを見せられたら最高と確かに思います。

しかし、本当の目的は人との関わりや様々な「体験」を通して、子どもたちには「生きていく力」を身につけて欲しい、なりたい自分の姿を実現して欲しいということなのです。

すると、私たちの考えは次の点に行きつきました。

「子どもたちの生きる力を育む体験に大人がどう関わるとよいのか」

(2) 子どもたちの生きる力と体験

学習指導要領に掲げられた「生きる力」を、子どもたちが自ら学び、考え、判断し、それぞれが思い描く幸せを実現する力※1あるいは実現に向けて取り組む力と考えると、学校を中心に行われる知識・技能の習得等の教育活動と共に、多種多様な社会体験が不可欠です。つまり、地域力で子どもたちに豊かな体験を保障することは、100年の人生を、他者とともに生きる力の基になる、主体的・対話的で深い学びを保障することなのです。

次に、生きる力を育む良い体験について考えるために「体験のススメ 失敗の

ススメ」で本会議が提案した体験の在り方を改めて確認すると、「子どもたちには、多種多様で、かつ、疑似体験ではない真実の体験を、失敗を恐れず、親も積極的に関わることで経験させましょう。」としています。

この内容を改めて考えると、地域と学校の連携の考えが定着しつつある現状※2から、関わる大人のネットワークを広げることがより重要になっているのではないかと思います。

※1 新学習指導要領解説リーフレット（文部科学省）より

※2 令和2年度コミュニティ・スクールを導入した小中学校：20校（内4校は2年目）

(3) 柏市におけるコミュニティ・スクールの実施状況

柏市では、令和元年度に初めてコミュニティ・スクールを導入しました。現在は、令和5年度までに全小中学校へ導入することを目指して進めています。

一方、従来から行われてきた学校支援の形から地域と学校の連携の形への移行期にある今、柏市の連絡協議会・研修会等の場では、次のような意見が出ています。

学校支援コーディネーター等連絡協議会（令和元年度）での意見

- ・地域と学校が共にウィンウィン（win-win）の関係を構築することが重要
- ・特定の方に負担が集中して世代交代に課題があるため、地域での子どもの育成がその地域自体を育てていくという認識を広げる必要がある
- ・地域と学校の話し合いが必要だが、時間と場の設定が難しいので、気軽に集まれる場所が必要

令和2年度は新型コロナウイルス感染症への対応に迫られた年となりました。

このことは地域と学校の連携を考えるコミュニティ・スクールの進めにくさという意味でも大きな影響を及ぼしました。

しかし、地域の大人が子どもたちの体験に関わることを考える私たちにとって、コロナ禍にあっても行われた学校運営協議会での話し合いは、大変重要な意味を持つものであると思います。

(4) 地域の大人には何ができるか

上記(1)から(3)までの内容を踏まえ、「体験」という社会教育の視点から地域のできることは何でしょうか。また、大人個々人が地域の子どもたちに目を向け、少しずつ気に掛けて見ていくことができるとしたら、その時に意識して欲しいことはどんなことでしょうか。

私たち柏市社会教育委員会議は、柏市で地域と学校の連携により子どもたちの体験の充実が進むために、今現在関わっている人だけでなくこれから関わって欲しい多くの方にお伝えしたいことと、それによって始められる取組についての考えをまとめ、次のとおり提言いたします。

3. 子どもたちの生きる力を育む体験のためにできること（提言）

子どもたちが「生きる力を育む体験」をするためには、様々な形で体験活動に参加できる環境づくりが必要です。また、そのために大人は何をどうすればより良い関わり方になるのでしょうか。

大人自身についての視点、子どもに向ける視点の2つの方向から提言します。

(1) 提言1

「大人自身が楽しもう，大人同士がつながろう」

子どもたちの体験には、家庭（親＝大人）と学校（先生＝大人）が深く関わっており、社会教育団体等が企画するイベントや講座が外部にあるだけでは散発的になりがちです。

これを持続的なものにするには、親子の興味を引き出す工夫や、学校と連携した取組が有効と考えます。つまり、大人が自ら楽しみ、それを見た子どもたちが「仲間に入りたい」「自分もこうなりたい」と思えるようなきっかけです。

体験の質を高めていくには、楽しいと思えるかどうかが大人も含めて大切です

大人が自発的に参加したくなる活動とは？

- ・参加条件（日程・場所・費用など）
- ・子ども（子どものためになりそう、一緒に参加したい）
- ・テーマ（楽しそう、興味深い、有意義そう）
- ・交流（新たな出会い、居心地、人の誘い）
- ・やりがい（喜んでもらえる、感謝される）

イベントや体験活動への保護者の参加が義務的で負担感を伴うものばかりだったり、逆にパッケージ化された体験活動にお客として子どもを参加させるだけでは、自発的で積極的な楽しい参加にはなりません。

初めは親子で気軽に楽しめるものに参加したり、小さな地域活動に参加することをきっかけに、楽しんで活動するカッコいい大人の姿を目にすることができると良いかもしれません。

一方、社会教育団体等に目を移すと、各種のイベントを企画して子どもの参加を待つだけでは、新たな担い手を迎えて活動を変化・工夫し続けていくこと

に限界があります。

このような中、学校は「社会に開かれた教育課程」の形を模索しながら地域を知ろうと動き出しています。学校と地域という大人同士のつながりが次世代の体験を動かす鍵になると考えます。

大人自身が楽しんで積極的に活動することで、子どもを体験の主役にする関わり方ができる、そんなカッコいい大人の姿を目指しましょう。

大人の関心ややりがい

(各委員の会議での発言から)

①子どもと親にどれだけ関心を持たせられるか

地域で門松づくりのイベントをしたら、予想を超えて100人以上集まった。

子どもが楽しい経験をする、来年もやって欲しいという要望になる。子どもがたくさん集まれば大人もついてきて、地域の大人同士の関わりがついてくる。

②ありがとうの手紙

15年間、朝の交通指導員を行っている。先日6年生が、「ありがとう」と写真付きのお礼のコメントを書いてくれた。

そういう子どもが大きくなった時に、育った地域を自分の地域だと思って戻って来てくれたら最高だと思う。

③主催イベントの参加者にアンケート

【参加したいイベント・コミュニティは？／どうして参加しているの？】

知的好奇心を満たせる、仕事につながりそう、人脈が広がる、居心地がいい、楽しい体験ができる、子どもに良い影響を与えられる、集まっている人が魅力的、専門家に会える、科学が好き など

(2) 提言 2

「子どもを主役にする関わり方を工夫しよう」

ア より良い体験のために

子どもに良い体験をさせることは簡単ではありません。芋掘りをした、木に登ったなどの行動そのものよりも一連の過程が大事ですし、何を体験するのかよりも、何のために体験するのかを大切にしたいと考えました。

一方で、学校教育の延長のような意図的にプログラムされた体験はやや窮屈です。思い通りにならないことや失敗すること、自分たちで工夫することは子どもにとって貴重な体験になると考えます。

イ 子どもたちの体験に関わる大人

子どもがしたいことと、大人がさせたいことは違う可能性があります。また、体験から子どもが受け取る感動や達成感も、大人が期待するものとは違うかも知れません。私たちは、大人は子どもの選択と感受性を大事にする「支援者」でありたいと考えます。

- ・子どもの感性を受け止め、寄り添うこと
- ・子どもの興味に基づくこと
- ・活動を詰め込みすぎないこと
- ・予定どおりにこだわらないこと

こんなことに時々悩みながら関わるのが良さそうです。

例えば、子どものアイデアでお祭りを企画・実施する時、割り当てられた役割をこなすだけでは物足りなくはないでしょうか。役の取り合いなどの摩擦も体験の一部ですし、つまらなそうにしていた子が急に積極的になったとしたら、予定どおりでないとしてもその子の気づきに寄り添っていられたらと思います。

ウ コロナ禍での体験活動の在り方

現状は

- ・新しい生活様式ガイドラインが体験で生じる関わりを制限してしまう
- ・自然体験の活動には、工夫次第で密を避けやすい強みがある
- ・オンライン化できる活動の取組は様々に始まっている

「体験」は、一緒に遊ぶ、あるいは人と関わるのが大事な分野です。

支援する大人は、上述してきた活動の良さを残していくために、ガイドラインをうまく使いながら腰を据えて対応していくことが必要になります。

一方、オンラインと組み合わせることで可能になる活動は、日々新しい取組が行われており、他の活動主体との連携がより必要になると考えます。

子どもを主役にする関わり方を意識し、様々な良い体験を支援する工夫をしていきましょう。

楽しさを大切にしたい体験への関わり

(各委員の会議での発言から)

①思い通りにならないこと

釣りに行ったが一匹も釣れなかった。でも、必ず釣れると分かっているにもかかわらず楽しくないと思う。どうなるか分からない、そういうわくわく感や思い通りにならない楽しさだったり、過程を楽しむことが大事。

②ルールを自分たちで作ること

子どもたちが様々なゲームや遊びをすると、遊びの中で考えながら生まれてくるルールがある。

「子どもたちが考えるルール」というのも尊重できればよい。

③もちつき

もちつきの会をやった。大人がついて食べさせるだけだと、初めは珍しくてもそのうち参加者が減ってしまう。でも、もち米を洗って蒸して一通りやるように変えたら参加者が増えた。作り方が分かって面白いし、親に教えてあげたら褒められたそう。面倒だったり危ないと避けていたけれど逆だった。

4. 地域での活動事例

子どもたちの生きる力を育む体験活動を、地域の大人の関わりによって進めていくにあたり、現在、実際にどんな活動が行われているのかを確認します。

(1) 柏市立大津ヶ丘第二小学校

～学校から元気を！地域つながり隊！～小学6年生の総合的な学習の時間の事例

概要

子どもが地域を知る為に外に出ていく取組であり、総合的な学習の時間を活用した、教科横断的な授業に位置付けられた活動

授業の目標

子どもが地域の人と関わることで地域に支えられていることを知り、自分たちができることを仲間と共に考え、実施する。地域の人へのインタビューや、他学年への発表等を通じて人とのつながりの大切さを知り、自己肯定感を育む。

活動内容

まち探検とインタビュー、ふれあい行事（コロナにより準備まで）地域のゴミ拾い活動

地域の反応

- ・インタビューから、地域の方の願い（地域を綺麗にして欲しい、元気に過ごして欲しい、親に感謝して欲しい）等を知った。
- ・地域の方の願いを受けて、児童が朝のゴミ拾い活動を実施。感謝の声掛けが多くあった。

活動の効果

- ・地域住民から児童への声掛けや関わりが増えた。
- ・児童の気付きが多くあった（地域の人（町会役員等）や施設・会社等）。

今後について

- ・6年生は想像以上に地域を知っていたので、もっと自由な発想ができそう。
- ・地域にアポイントメントを取る時、窓口になる人や仕組みが安定するとやりやすい。
- ・1年間で終わらせず継続したい。

(2) 柏市しこだ児童センター

～夏だ！おばけだ！～ 児童センター主催の夏休み企画の事例

概要

子どもが実行委員になり、お化け屋敷を企画・準備・実施する取組で、異年齢交流に特色がある。スタッフである大人は黒子の役割を担う。

実行委員（子ども）の役割

- ・子どもはお化け屋敷のアイデアを出す（中・高校生ボランティアがサポート）。
- ・役割を分担して準備・製作し、当日のお化け役、受付役などを担う。

児童センターの役割

- ・実行委員の募集、会場備品提供、安全管理等

- ・子どもの見守り，声掛け（アイスブレイクやニックネーム呼びなどの雰囲気作り）

子どもの声

- ・みんなが喜んでくれて，楽しかったのでまたやりたい。
- ・来年はお化け屋敷の実行委員をやりたい（当日のみの参加者）。
- ・人前で話すことは苦手だったが，自然とできるようになった。
- ・小さい子と一緒にやるのは大変だけれど，とても可愛かった（中・高校生）。

スタッフの声

- ・子どもが一生懸命取り組む姿を見て元気をもらっている。
- ・子どものやりたいことができるだけ実現するようサポートしている。
- ・小さい子を助けてあげる大きい子の姿等，子どもの成長が見られて嬉しい。
- ・普段児童センターで遊ぶ時と違う一面が見られて嬉しい。

今後について

- ・子どもの希望により，児童センターのお祭りをお化け屋敷にしたので，今後も工夫しながら実施していきたい。
- ・いろいろなボランティアに関わってもらえるよう，声かけやPR方法を検討したい。

事例を通して提言 1， 2 について検討する

上記の取組は，それぞれ学校教育目標と児童センターの役割を持つものですが，私たちの「子どもたちの生きる力を育む体験に大人がどう関わるとよいか。」という問いに対して大事なヒントを与えてくれます。

ア 小学6年生の総合的な学習の時間

総合的な学習の時間

（文部科学省 HP から）

総合的な学習の時間は，変化の激しい社会に対応して，自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとすることから，思考力・判断力・表現力等が求められる「知識基盤社会」の時代においてますます重要な役割を果たすものである。

学校が，地域を知ろうと子どもと一緒に出て来た時，地域の大人は学校の意図を理解した上で受け止めることが必要です。もし想像と違う事を頼まれたとしても，それは学校が地域を受け入れないのではなく，おそらく教育的意図によるものです。

お互いのやり取りが増えると好意的な声掛けが増えることもわかりました。子どもとの交流は大人自身の喜びや楽しみを生み，学校との間では共通の話題になり，次のアイデアにつながります。

学校が何かをお願いしたい時、大人同士のつながりがあればハードルは下がります。

一方、まち探検やインタビューへの協力の際には、子どもの発想を大切に、子ども自身が聞きたいことをしっかり受け止めることが、子どもを主役にする関わり方と言えそうです。また、そうした大人の生き方に触れる体験は、子どものキャリア教育の観点からも重要なアプローチと言えます。

イ 児童センター主催の夏休み企画

児童センターの取組では、異年齢の子どもたちが集まって作るお化け屋敷を支援する大人側の工夫や充実感がポイントになると考えられます。

子どもが自分の思いや企画を実現していく過程で起きる様々な変化を見守ることは、関わる大人にとっての楽しさや面白さになりえます。また、行事の後に大人が行う振り返りの場は、大人同士がつながるチャンスとなりそうです。

与えられた枠の中で遊ぶことは子どもを主役にする体験とは言えないと考えると、大人は安全な場や枠組みを用意しても「答え」は用意せず、失敗や試行錯誤から発見した、次の挑戦や成長を喜んであげられたらと思います。

地域に多くの体験の機会があり、それに関わる大人は単に人が集まるイベントとしてではなく、子どもとの関わり方を工夫し、かつ、それを楽しめる、そんな体験の場が増えると素晴らしいと思います。

地域と学校の連携で守りたいこと

(学校目線・会議の発言から)

- ①子どもたちが絶対に安心・安全であること
- ②教育課程・学習内容と関連していること
- ③学校と地域がウィンウィン (win-win) の関係であること
学校のウィン(win) : 子どもが育つこと
地域のウィン(win) : 学校・保護者・地域が仲良くなること

- ・年に1度のイベントよりも小刻みのふれあいを！
- ・親世代や教員にない目線の提案がうれしい

5. 今後の活動の提案

ここまで見てきたとおり、子どもたちに豊かな社会体験を保障する上で地域の大人同士のつながりは大変重要です。そこで、地域の活動事例から得られたヒントを生かし、同時に、今後コミュニティ・スクールの中に取り入れていくことで有効になると思われる取組案の一例を、次のとおり提案します。

地域連携ルーム等の設置と活用

行政の取組として、本会議答申「地域と学校の連携について」の具体案の一つである「地域連携ルームの設置」を改めて提案します。

地域連携ルームを、地域の人が学校に立ち寄り教員や子どもたちと交流する場と位置付け、個々の活動のつながりの拠点とします。ただし、設置にあたっては学校の実情に応じて余裕教室の活用等により行われることを想定します。

ア 想定される具体的活用策 () 内は現在の中心的役割を担うもの

- ① 学校支援ボランティア活動（学校支援コーディネーター）
日常的に地域の方が出入りするスペースを設けることで活動をしやすくすると共に、情報交換を活発化
- ② 総合的な学習の時間等を活用した地域連携による授業
例：まち探検、防災教育、環境教育（地域・学校支援コーディネーター等）
学校とのニーズのすり合わせや、活動者同士の打合わせを十分行いながら実施することで、持続性のあるものに
- ③ 放課後子ども教室（放課後子ども教室コーディネーター）
週1～2回程度の学習支援と、体験活動や遊びの場を提供
安定した実施が可能となったら、学期に1度などの頻度で下記の取組
・子どもが企画するイベント
・知的好奇心を刺激する講座（理科実験や、工作ほか）
- ④ 夏休み子ども教室（各学校・教育委員会）
中学校・高等学校との連携、企業との連携、地域団体等との連携により多様な体験講座を実施
近隣センターや児童センター等を会場に複数校で実施することも想定

イ 具体案におけるそれぞれの大人側の役割

- ・保護者：子どもと参加，ボランティアとして活動
- ・教員：連携授業実施，子どもへの情報提供
- ・中・高校生：小学生をサポートしてのイベント実施，子ども教室の講師

- ・地域の活動者（団体等）：各種講座の企画提供，参加
- ・地域の活動者（一般）：全てのイベントにボランティア参加
- ・社会教育施設（図書館，資料館等）：調べ学習の支援，資料提供
- ・大学等：授業づくりへの参画，学生のボランティア参加

ウ 具体案により期待される効果

・上記①～④は，現在は個別に実施・調整されていますが，地域連携ルームを拠点にすることで個々の取組が出会い，更に発展することが期待されます。

・日常的な交流を通して学校と地域が顔の見える関係になり，地域連携による授業等を継続的に行うことで，既存の授業の充実と教員の負担軽減効果が期待されます。

・子どもの体験活動等に関わることは，地域の大人にとっての大事な学びになるだけでなく，一人一人の生きがいややりがいの実感が地域に広がり，まちを活性化させる力につながるきっかけになると期待されます。

つまり，この取組は学校だけを起点に据えたものではなく，地域の大人が少しずつ子どもに心を寄せ，学校と一緒に子どもを育てていくことを意味する，地域学校協働活動の姿であると捉えられます。

エ 不足している要素

- ・地域連携ルーム等（学校の実情に応じて余裕教室等の活用を含む。）
- ・統括的コーディネーター
- ・団体等の活動情報の発信，地域連携による活動事例の蓄積・共有

行政には地域連携ルーム等の設置と共に，統括的コーディネーターの役割を担う人材（地域学校協働活動推進員等）の養成が求められます。

また，私たち社会教育委員の立場からは，コミュニティ・スクールの全校実施と併せてコーディネーター人材の養成を進めるにあたり「社会教育士制度」のような社会教育法の改正に伴い整えられた講習制度等の活用を検討できると良いと考えます。

地域連携ルーム等を拠点に，様々な情報や活動の事例を活用しコーディネートする人材が機能することでより良い活動となり，地域学校協働活動の一つの理想形となることが期待されます。

オ 新しい生活様式に合わせた活動の工夫

これらの取組は、必ずしも対面により実施するものではありません。また、学校及び地域に合ったやり方を工夫し、できる取組を継続することが望まれます。

ー令和2年度に柏市で実践されたオンラインによる活動の一例ー



かしわミュージアム 2020年5月製作
一般公募で集まった皆さんによる吹奏楽の定番曲「宝島」のテレワーク演奏を1つにしています。



オンラインビブリアバトル（知的書評合戦）
中学生が本を読み感じたことを共有し、様々な世代へ伝えていくことを目的で開催しました。

第4次柏市生涯学習推進計画 ～新しい生活様式に合わせた新しい学び～ より

地域の大人の方には、様々な活動の場において子どもとの関わり方を工夫し、それぞれが楽しんで活動されることを期待します。

一人一人の活動によって、子どもたちの生きる力を育む体験を充実させましょう。

この取組は社会教育分野の中に完結するものではありません。社会教育行政には、地域と協力するとともに、様々な行政領域や団体等との連携によって、この提言を具体化していくことが求められています。

6. おわりに

ある地域のコミュニティ・スクールでは、集まった個性的なメンバーが自身の得意分野を見せ合うことから話が動き出したそうです。その後はどうするのですかと伺うと、学校と一緒にこんな事ができますよとお知らせするリストを作るのだそうです。また、数年来の多世代交流サロンでのつながりがある地域では、学校からの依頼をきっかけに子どもたちと文化財を巡り、地域の歴史を伝える活動を続けています。

学校と地域の連携によって子どもたちの体験を充実させると聞くと、一緒に新しい取組を新たに始めると考えがちです。しかし、新たな取組が過大な負担になったり、一方の意図しか満たさないものになっては残念ですし、継続的なものにはならないでしょう。

ですから、この提言は特別なことを始めるよう求めるものではありません。それぞれの活動を知ることがまずは重要ですし、元々の活動の中で工夫できることは必ずあると思います。今あるものをつなぎ合わせ、発展させることにより次の一步を踏み出しましょう。

地域には、子どものためにして欲しいことを言ってもらえるのを待っている人たちがいます。学校にも地域の人をお願いしたいことがあります。二つの思いを結びつけるために、小さなきっかけを大事に日頃から話をしやすいつながりを持ち、一緒にやりたいことを伝え合って行けたらと思います。

最初はお互いの期待が思っていたよりも遠かったとしても、小さな取組が生む楽しさや感謝の気持ちが続ける原動力になると期待します。

この提言によって、大人自身が楽しんで関わりると同時に子どもが主役になれる体験が多くなり、子どもたちの健やかな成長の糧となれば、これに勝るものはありません。

私たちは、これらの活動を実現するために有効と考える行政の取組についても提案しました。教育委員会には、地域と学校の連携により子どもたちの体験が充実する為の役割を積極的に担い、好事例を積み上げていって欲しいと思います。

最後に、令和2年12月にご逝去された故坂巻勝委員のご冥福をお祈りし、感謝の思いを捧げます。

柏市社会教育委員会議

參考資料

社会教育委員会議 協議の経過

【令和元年度】

令和元年7月31日 第1回社会教育委員会議

- 社会教育委員の概要

- 協議「今期の社会教育委員会議で取り上げるテーマについて」

過去二期に引き続き、地域で子どもを育てるという考えを念頭に議論し、子どもを中心とした地域づくりにつなげていくことを想定して協議を行った。

主な意見

- ・子どもがコミュニティの一員、担い手に
- ・ふるさと（地域）へのつながりが希薄
- ・教育格差
- ・社会体験不足
- ・子どもと関わるナナメの関係
- ・持続可能な教育が必要
- ・子どもがそこで生まれ、育むふるさとづくり

令和元年11月6日 第2回社会教育委員会議

- コミュニティ・スクールの進捗状況報告

- 今期のテーマ「地域に愛着を持つ子どもの育成について」

- 協議「子どもに地域への愛着を持たせるためには何が必要か」

前回協議の意見から、地域に愛着を持つ子どもの育成は大事であると認識し、社会教育委員会議では「愛着を持てる環境をどのようにつくっていくか」について議論を行った。

主な意見

- ・まず、親や地域の大人がつながることが必要
- ・大人自身が楽しめるかが大事
- ・子どもに行事で役割が与えられていること
- ・子どもにとって楽しい経験となったかが重要
- ・イベント等を通じて、子どもが認められたり大事にされた体験が大事
- ・「地域への愛着」は良いテーマだが、愛着はゴールだと思うし目的にすると息苦しくなる
- ・「愛着」は与えられるものではなく、その人から出てくるものだろう

令和2年2月26日 第3回社会教育委員会議

- 社会教育関係団体に対する補助金交付に係る意見の聴取について

- 第4次柏市生涯学習推進計画案について

- 子どもの地域への愛着を育むために必要なこと

前回協議の意見から、大人がつながり楽しむことと、子どもにとって楽しい体験であること（地域での役割があること）の2点が重要と考え、議論を具体化した。

●事例発表 大人のつながり、楽しみながら地域へ参加の参考となる活動として

羽村太雅委員 柏の葉サイエンスエデュケーションラボ会長

「科学コミュニケーションを通じた地域交流の活性化」10年の活動の軌跡

「科学コミュニケーションを通じた地域交流の活性化」10年の活動の軌跡（一部抜粋）

柏の葉サイエンスエデュケーションラボ

★ 柏の葉で、科学コミュニケーションを通じた「地域交流の活性化」を目指して活動

★ 2010年6月設立

どんな人がいるの？（全44名）

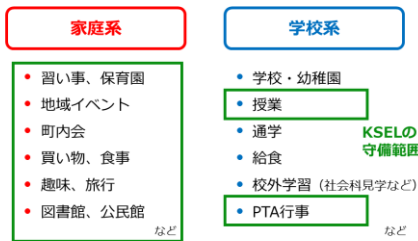
★ 東大などの院生・研究者 15名

★ 地元の人など

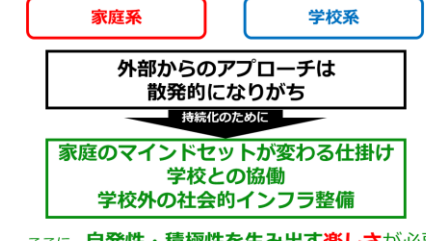
- 学部生 4名 高校生 3名
- 若手社会人 3名 主婦 6名
- 卒業生 9名 オジサン 5名



子どもと地域コミュニティ／風土の関わり

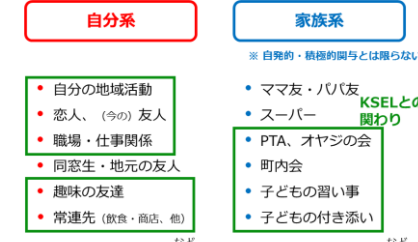


子どもと地域コミュニティ／風土の関わり



ここに、自発性・積極性を生み出す楽しさが必要

大人と地域コミュニティ／風土の関わり



大人と地域コミュニティ／風土の関わり



活動事例 | コミュニティ／風土との関わり



地域への愛着をはぐくむには



地域別・テーマ別には各種接『点』あり
複数課横断&ビジネス視点導入による
全市的な『面』的接触への拡がりを期待

質疑

- ・人を集めるのは大変だと思うが、どのようなことをしているか。
- ⇒活動の中で関わってくれた人が、継続的に関わってくれていたり、実際に参加した方の口コミ等で輪が広がっている。
- ・人気のあるイベントはあるか。
- ⇒理科の修学旅行，研究者に会いに行こうは定員を超える申し込みがある。チラシのデザインやテーマ設定に力を入れている。

- 協議「大人（親）がつながる方法や大人が楽しみながら地域活動に参加するにはどのようにしたらよいか」

主な意見

- ・中心に子どもの笑顔があること
- ・地域活動のお客様として参加するだけでは面白さは半減する
- ・大人が子どもに伝えたいものを持っていること
- ・小さな活動をつなげること（行政の関与も必要）
- ・親が子どものためと思える取組
- ・親子で参加や体験ができること
- ・子どもがしたいことを大人が手助けする
- ・地元の誇り，風土を知ること
- ・コミュニティ・スクールを通じて学校と連携を進めるのが効果的

【令和2年度】

令和2年8月28日 第1回社会教育委員会議

●提言の骨子「(仮) 地域に愛着を持つ子どもを育むために」について

「地域への愛着」は目的ではなくキーワードとして大事にすることとし、表現を検討していく。

●講話 青山鉄兵委員 文教大学准教授

「子どもの体験にどう関わるか」

子どもが育つ生育環境の変化から、子どもは大人が与えないと体験ができなくなった社会という前提がある中で、体験が教育的であることはある程度やむを得ない。

しかし、一歩目に関わる大人が体験を意識することで、与える体験の中にも体験らしさが残る。

子どもの体験にどう関わるか (話題提供資料より一部抜粋)

子どもの体験を考えるための前提

◇体験活動への社会的な注目

- ・子どもが育つ環境の変化
- ・子どもの「体験不足」という指摘
- ・体験を通じて育まれるものへの期待
- ・「自然にできるもの」から「わざわざ体験させるもの」へ
- ・「わざわざ体験させる」ことによって生じる課題

より良い体験のために～大人の関わり方を考える～

◇「体験」を体験させることの難しさ

- ・何を体験させるべきか？
- ・どうやって体験させるべきか？

◇支援者にもとめられる2つの視点：「教育的であること」と「教育っぽくないこと」

- ・教育的意図にもとづく体験のデザイン
- ・教育的な意図だけでは不十分
- ・支援者側のポイントになりそうなこと

◇コロナ禍での体験活動のあり方

- ・コロナ禍での体験活動の動向
- ・「遊び」や「一緒にいること」の価値～濃厚接触へのこだわり～
- ・ソーシャルディスタンスはあっても「すき間」はない！？
- ・不信と分断を生まないために～ガイドラインとの付き合い方～

主な意見

- ・普段興味のないことにも大事なことがあるので、親も意識して体験や勉強をさせるようにしたいし、子どもに近道を要求しすぎないようにしたい
- ・体験は生涯学び続けるための基礎として大事という位の意味で捉えるべき
- ・教育的という言葉も立場によって様々な考え方があり
- ・子ども自身が探求する力をつけることは「生きる力」にもつながる

・大人が心配し過ぎた結果子どもが窮屈になる面もあるので、楽しい、嬉しいなど、子どもながらの楽しみが見い出せるシンプルな発想も大切

●協議「子どもが楽しいと思える経験とは、どのようなイベントや活動があるか」

主な意見

- ・気軽に親子で参加できるもの
- ・思い通りにならない体験も必要
- ・子どもの発想で地域の歴史を調べる
- ・柏版キッザニア（柏ならではで、かつ、子どもが主役）、子ども町会
- ・子どもが本気でやった実感を持てる体験
- ・地域の取組を学校にそのまま取り入れるのは難しくても、地域と学校の両方が少しずつお互いを取り入れる
- ・大人がやりたいことを副産物として仕込み、子どもが参加したくなる看板を

令和2年12月21日 第2回社会教育委員会議

●第4次柏市生涯学習推進計画案について

●提言骨子案「(仮)子どもたちの健やかな成長のためにできること」について
生きる力を育む体験への関わりをテーマにした骨子案について検討

主な意見

- ・子どもが主役には賛成、評価して認めていく取組を
 - ・子どもを主役にするかっこいい大人になろうにしようか
 - ・組織の大人の意識改革が必要、社会教育関係者と一般行政の連携を進めるべき
 - ・学校が取り組みやすい提言案である、社会教育と同じ方向性で進められると良い
- 協議「地域での体験活動をどのようにすると効果的に行えるか」

事例紹介

「柏市立大津ヶ丘第二小学校～学校から元気を！地域つながり隊！～」

小学6年生の総合的な学習の時間の事例

主な意見

- ・インタビューでは大人は子どもが聞きたいことに応えること。大人の生き方に触れることは子どものキャリア教育にもなる
- ・子どもとの交流は大人の喜び、楽しみになる
- ・子どもが接した地域の人がある話題を出してくれると、学校とつながりが生まれる
- ・〇〇博士、〇〇の達人などの情報作成
- ・子どもの成長の為にできることはしなければ！学校の目標は明確に知りたい

「柏市しこだ児童センター～夏だ！おばけだ！～」児童センターの夏休み企画の事例

主な意見

- ・子どもの考え・企画を実現する場は大事
- ・子どもの変化を見守るのは面白い！大人が反省会をすともっと面白い
- ・与えられた枠内で遊ぶのは主役とは言わないと心得ることが大事

令和3年2月26日 第3回社会教育委員会議

- 社会教育関係団体に対する補助金交付に係る意見の聴取について
- 提言案「生きる力を育む体験への関わり～子どもたちの健やかな成長のためにできること～」について検討

主な意見

- ・具体的な取組の一つとして地域連携ルームを学校に置くのは良いが、ベクトルが学校に向き過ぎない書き方にできると良い。
- ・拠点としての地域連携ルームとコーディネーターの存在がセットであることが肝要。
- ・現在、地域で活動する人の入口が見える書き方にしてはどうか。地域連携ルームは近隣センターなどを活用しても良い。
- ・拠点の設置、コーディネーターの設置と並び情報提供が大事。地域団体の活動情報や好事例の積み上げなど。
- ・学校と地域のバランスが大事。最初は学校が進めるとしても、コーディネーターに委ねていくことが望ましい。

柏市社会教育委員会議 委員

議 長	寺本 妙子	開智国際大学教授
副議長	常野 正紀	多世代交流型コミュニティ実行委員会代表
	岩田 久美	柏市立柏第四小学校長
	杉本 秀彰	柏市立柏第二中学校長
	門井 隆志	柏市子ども会育成連絡協議会長
	坂巻 勝	柏市青少年健全育成推進連絡協議会副会長 ※任期：令和元年6月1日～令和2年12月2日
	内藤 正寿	さわやかちば県民プラザ所長 ※任期：令和元年6月1日～令和2年3月31日
	岩崎 雅夫	さわやかちば県民プラザ所長 ※任期：令和2年6月1日～令和3年5月31日
	根本 利治	柏市ふるさと協議会連合会長
	羽村 太雅	柏の葉サイエンスエデュケーションラボ会長
	村田 静枝	柏市ストップ温暖化サポーター 元我孫子市社会教育指導員
	吉田 智紀	柏市P T A連絡協議会長 ※任期：令和元年6月1日～令和2年5月31日
	前川 万	柏市P T A連絡協議会長 ※任期：令和2年6月1日～令和3年5月31日
	伊藤 薫	柏市民生委員児童委員協議会副会長
	牧野 篤	東京大学大学院教授
	青山 鉄兵	文教大学准教授
	本多 紀子	公募委員

任期：令和元年6月1日～令和3年5月31日

